MEIJI MURA 明治村だより

Vol.62
2010 Winter

北里研究所本館・医学館 保存修理工事……2
日本とドイツの学術交流　ヴォンデ、ベアーテ…4
近代日本の西洋医学導入のあゆみ……6
冬の催しもの……7

日本とドイツの学術交流

ヴォンデ、ベアーテ

二〇一一年一月で、日普修好通商条約が締結されて一五〇年経ちます[※1]。二〇一〇年秋から二〇一一年にかけて、ドイツでは、在ドイツ日本大使館、そして日本では、在日本ドイツ大使館の後援の下に、日独両国の各地で様々な催しが予定されています。そこでこの『明治村だより』で、ドイツ・ベルリンから見た、明治時代の日独（日普）関係を振り返り紹介したいと思います。

二〇一〇年はベルリンにいる私たちにとって、記念すべき特別な年でした。ベルリン大学（現フンボルト大学）が創立二〇〇周年、そして、シャリテー（現フンボルト大学付属病院で、ヨーロッパ一の規模を誇る医学研究養成機関　写真1）が創立三〇〇周年を迎えました。ベルリン大学は明治時代の日本のエリート官僚の、そしてシャリテーは日本の近代医学の揺籃の地であったことをご存知でしたでしょうか。

写真1　シャリテー（現フンボルト大学附属病院）

明治初期、日本政府は数多くの若者をヨーロッパに送り出します。彼らのほとんどは、「お雇い外国人」教師の下で、大学教育を終えた研究者たちでした。当初の留学先は、フランス・イギリスでしたが、一八七〇―七一年の普仏戦争でドイツが勝利を得た後、日本人の留学先のトップは次第にドイツへと移っていきました。一九〇〇年以前の日本人の留学先の六―七割、二十世紀初頭には四分の三もの日本人留学生がドイツで学びました。

写真2
ルドルフ・ハルトマン博士著
『ドイツの日本人学生 1868-1914』

私の大学の同僚であるルドルフ・ハルトマン博士は、彼の著書『ドイツの日本人学生　一八六八―一九一四』（Japanische Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen 1868–1914　写真2）でドイツの大学等に正式に登録した七四七名の日本人留学生と、『ドイツの日本人留学生辞典　一八六八―一九一四』（Lexikon Japans Studierende in Deutschland 1868–1914）[※2]で森林太郎（鷗外）や北里柴三郎などのように私的に教授の了解を得た研究者や聴講生も含んだ二、六九四名を扱っています。そして一八七四―一九一六年の間に、計四〇五名の日本人がドイツで博士論文を提出し、内訳は医学が三二五人と圧倒的多数を占め、それに続いて文学・語学が四七人、法学が二二人となっています。

千名を超える学生の興味は主に医学に向けられ、四割近くが医学部に所属していました。日独間の交流において、医学は最初から先駆的な役割を果していたのです。医学の専攻分野については、記録にのこっている学籍簿によると以下の通りです。

内科／一二五人、外科／九三人、眼科／六二人、
婦人科／四九人、病理学／三五人、
皮膚病／三二人、細菌学／三一人、
解剖学／二九人、衛生学／二六人、
薬学／二七人、耳鼻科／二四人、
小児科／二二人、生理学／一九人、
神経医学／八人、泌尿器科／七人、
小児治療学／四人、歯科／五人、精神科／三人、
胃腸科／二人、児童学／二人、胎生学／一人

初めて正式にドイツで学籍登録した日本人は、一八六八年の冬学期からハイデルベルク大学で医学を専攻した馬島（後の小松）済治でした。彼が登録する二年前の一八六六年に、赤星研造がドイツに到着しているのですが、入国後しばらくはドイツ語習得に専念していたため、ハイデルベルク大学医学部への入学は一八七〇年です。両者とも武家出身で、それぞれの藩からドイツへ派遣されました。

ベルリン大学に日本からの留学生が集中したのは一八六八年から一九一六年の間で、七四七人の学生が学籍登録し、学問を修め、帰国後には重要なポストに就いて、日本の近代化を推し進めました。

シャリテーでは一九一四年までに三〇八人が学び、学籍簿は医学分野の「Who is who in Japan」として読むことができます。有名な人物を挙げると、緒方正規、日本で細菌学の基礎を築いた北里柴三郎、癌研究者の山極勝三郎、ドイツに倣って日本最初の法医学研究所を創立した片山国嘉、ならびに病理学研究所の創立者である三浦守治（ウィルヒョウに師事）などがいます（写真3）。呉秀三は日本における精神医学の先駆者となり、三田定則は血清学、長井

長義は薬学の基礎を築くことに貢献しました。

ベルリンにおける東洋人留学生の草分けとなったのは、一八六八年、医学を修めるためにベルリンにやって来た青木周蔵※3と萩原三圭※4でした。彼らは旧幕府時代に派遣されましたが、ベルリン大学に正式に学籍登録をしたのは一八七〇年のことです。

彼らに続く人物には、佐藤進（写真4）※5がいます。後の順天堂医院の院長です。彼は、明治政府が発行した海外渡航免状第一号を得ただけでなく、一八七四年八月一〇日、三二ページの論文「児童の下痢について」（写真5）をドイツ語で書き上げ、日本人としてだけでなく、アジア人としてはじめて、ドイツで医学博士号を取得して帰国した人物です。一八七〇年から七四年までシャリテーで外科学を専攻し、後に佐藤は日本における外科のエキスパートと称されました。帰国後、西南戦争時に陸軍軍医監となりましたが、一八八〇年には、順天堂医院の経営に専念すべく退役しますが、その後の日清・日露の戦時には、再び軍医監、陸軍軍医総監に就任します。一九〇七年男爵を叙爵し、晩年は東京医学校（東大）で教鞭をとりました。

佐藤の博士証書は、ベルリン大学の学長を務めた数学者カール・ヴァイアーシュトラース（WEIERSTRASS, Karl）及び、シャリテーの外科医長で、外科ハンドブックや手術指導書※6を執筆したアドルフ・バーデレーベン（BARDELEBEN, Adolf）によって授与されました。二六歳の佐藤は、当時の新聞によれば、「卓越したドイツ語力」で口答試験を受け、佐藤は成績は「優」で合格。バーデレーベン医長に他の学生同様にラテン語で博士号を授与してもらうよう願い出たそうです。これに対してヴァイアーシュトラース学長は、「長い道程だった。君は私たちの仲間になった。君はこれにてドクターの称号を得た。しかしその前に、君は君なりのやり方で、医師になるための宣誓を行う必要がある」と答えたそうです。そこで佐藤は、当時のやり方に倣ってヒポクラテスの誓詞※7を行いましたが、キリスト教徒の医師が通常行うsanctum evangelium（聖福音書）の誓いは、寛容なプロイセンの時代が幸いして省かれました。彼は当時ドイツ国内で、二十五人の有能な医師のひとりに数えられました。

佐藤がドイツで初の東洋人の博士であるとすれば、北里柴三郎（写真6）はプロイセンで初の外国人教授でした。彼は、一八八四～九一年までロバート・コッホが所長として勤務した衛生学研究所で、研究に明け暮れ、一八八九年、世界で初の破傷風純粋培養法に成功し、翌年、エミール・フォン・ベーリングと共に血清療法を開発しました。北里のドイツ留学はもともと三年、長くて四年、それも後半の二年はミュンヘンで学ぶよう石黒忠悳（ただのり）から申し渡されましたが、北里は納得しません。その場に居合わせた森鷗外は、北里の理由に納得し、上司石黒忠悳へ口添えします。一方、コッホのほうでも、北里のベルリン滞在延長許可がとりやすいように、当時衛生研究所の正式職員になっていた北里が、ベルリンでこのまま研究を続けるなら、帰国の際に教授に任命するという約束をします。（一八九二年五月一日にプロイセン王国は、アメリカ経由で帰国途上の北里に"Professor"の称号を授与しました。）

北里柴三郎について興味をお持ちの方は、一九一五年に建設された北里研究所を緻密に復原した明治村を是非訪れてみてください。二〇一〇年三月に明治村を訪れた私は、その

写真3　ドイツの日本人留学生たち（ベルリン　フリードリッヒ街の写真館で）
①石黒忠悳　②片山国嘉　③隈川宗雄　④江口襄
⑤北里柴三郎　⑥谷口謙　⑦加藤照麿　⑧中浜東一郎
⑨武島務　⑩森林太郎（鷗外）　（写真提供　北里研究所）

写真4　佐藤　進
（写真提供　順天堂大学）

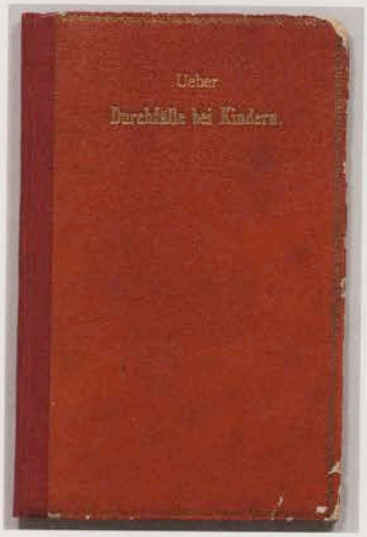

写真5　佐藤進の論文の表紙
（写真提供　順天堂大学）

写真6　北里柴三郎（写真提供　北里研究所）

緻密さにとても感動しました。

最後にフンボルト大学では、学生の学籍簿から試験結果や博士証書などに至るまでを、大切に保管し、歴史を紐解く上で貴重な資料として研究者はじめ多くの人々に活用されています。また創立時より私が勤務しているベルリン森鷗外記念館※8（写真7）は、ここでご紹介した日本における学問のフロンティアの子孫にとって一種の巡礼地であり、寄港地でもあり、また遠き東の国からの旅行者にとっては、彼らのルーツを探すための場所でもあります。

写真7　ベルリン森鷗外記念館

WONDE, Beate（ベルリン森鷗外記念館　副館長）

※1　当時ドイツ連邦は諸国に分かれており、日本はドイツ連邦の一王国であるプロイセン（普魯西）とのみ修好通商条約を締結しました。

※2　ベルリン国立図書館（Staatsbibliothek）のサイトでご覧いただけます。http//ead.staatsbibliothek-berlin.de/digital/japans-studierende/

※3　青木周蔵（1844―1914）は、日本で学び始めた医学の知識をさらに高めるためにベルリンへとやって来たのですが、その後、二番目に日本人留学生が多かった法学部へと転向し、ルドルフ・フォン・グナイストに師事、帰国後はドイツ公使として、外務大臣を二度務め、日独間の関係を深めるのに、たいへん重要な役割を果たした。

※4　萩原三圭（1840―1894）は、一八七〇年から七四年までシャリテーで学び、後に東京医学校の教授、宮中侍医、京都大学の医学部、学部長となった。彼の博士論文は一八八六年にライプツィヒにて書き終えた「髄膜炎について（Über die Meningitis）」。

※5　幼少期のについては次項の文章を参照。

※6　全四巻、一八七九―一八八二年発行、同書はドイツ国内で、長期に渡って最高の指導書と見なされていた。

※7　医師としての倫理的な義務・責任についての宣誓

※8　ベルリン森鷗外記念館は森鷗外がベルリンで滞在した最初の下宿の建物を利用し、現在フンボルト大学日本学科の付属機関として位置づけられ、ドイツと日本に関する事柄について積極的に活動しています。

近代日本の西洋医学導入のあゆみ

江戸幕府はすでに安政五（一八五八）年、蘭方医を採用していましたが、太政官は明治元（一八六八）年、西洋医術の採用を布告しました。これが契機となり、江戸時代まで主流であった漢方と称された東洋医学ではなく、西洋医学受容の方向性が明確になりました。そこで設けられたのが、新しい医療体制はどうあるべきかを調査する「医学校取調御用掛」で、藩医の岩佐純（福井藩）、相良知安（佐賀藩）が任命されました。

どの国から医学を学ぶかということに関しては、戊辰戦争の際、官軍の医師でイギリス人ウィリアム・ウィリスが活躍したことから、政府内にはイギリス医学の採用を求める声もありましたが、岩佐・相良の二人は十九世紀半ばのヨーロッパ医学界におけるドイツ医学の優位性、幕末に日本でオランダ人医師たちから得ていたオランダの医書のほとんどがドイツの医書の翻訳であること、当時のドイツの国情が日本と似ているなどの点から、明治三（一八七〇）年、ドイツ医学を採用することを決定し、駐日ドイツ公使フォン・ブラントに依頼し、ドイツ人教師の招聘を求めました。折からフランスとの間で普仏戦争が勃発し、実際に教師の到着は翌明治四（一八七一）年となりましたが、外科教師として陸軍軍医少佐ミュルレル、内科教師として海軍軍医少尉ホフマンが着任しました。彼らは天皇の侍医になるという条件とともに、日本人医師の下ではなく、文部卿の直下となることが定められており、ただ医学を教えるだけではなく、それまでの日本の医師たちから非難を受けながらも、医学校の制度を改め、今日の医学教育の礎を築きました。

日本のドイツ医学導入決定以前に、ドイツ医学を学ぶためいち早く旅立った医学生がいます。後に順天堂の第三代堂主となる佐藤進※1（写真1）です。佐藤進は弘化二（一八四五）年、常陸太田（現在の茨城県）の酒造家高和清兵衛の長男として生まれ、安政六（一八五九）年、親戚筋にあたる佐倉（現在の千葉県）順天堂の第二代堂主佐藤尚中（たかなか）の許で医学を学び、慶応三（一八六七）年、二十三歳の時、尚中の養嗣子となり、佐倉藩の医師として、鳥羽伏見の戦いの際には、尚中とともに負傷者の治療に従事しました。この経験は進をさらなる医学研究へと駆り立て、明治二（一八六九）年、進は国内での勉学では飽き

写真1　佐藤　進
（写真提供　順天堂大学）